

# 大三元

<http://www.daisanbunmei.co.jp>

# 8

August 2008 No.584



[特集]

# ピンチを チャンスに

瀬戸雄三／井料瑠美／小山太郎

[連載対談]

## 人間勝利の 世紀をめざして

—「歴史」と「文化」と「教育」を語る

章開沅×池田大作



©Yuichi Hirayama

# 困難に 挑戦し続ける！

多くの世界的ミュージシャンと共演してきた、  
日本を代表するドラマー・小山太郎さん。  
その人生は「ピンチをチャンスに変える」連続だった。

## 小学生ドラマー

振り返ると、僕の人生はピンチの連続でした。そして、そのたびに勇気を奮い起こして、ピンチをチャンスに変えてきました。

五歳のとき母が胃がんで亡くなり、僕自身も幼稚園を中退するぐらい体が弱く、小学校も小児ぜんそくで休みがち。なかなか学校にも通えず、次第にイジメにあうようになりました。

当時、実家は染色業をしており、染料入れの空き缶がたくさん転がっていました。僕はその空き缶

を、よくドラム代わりに棒で叩いて遊んでいました。その姿を見てジャズ好きの父が、「ひよつとしてドラムが好きなのかもしれない」と思い、ドラムを買い与えてくれたのがキッカケでした。

その後、「小学生ドラマー」として地元・栃木で話題になり、卒業式前の謝恩会でドラム演奏を披露しました。それを機に、周りの僕を見る目がガラッと変わりました。イジメもピタッとなくなりました。自殺しようと思うぐらいのつらい日々を乗り越えられたのは、ドラムに出合ったからな

ドラマー

# 小山太郎

こやま・たろう

●1965年、栃木県出身。ベーシストの河上修氏の勧めで上京し、80年代半ばから日本のジャズシーンの真ん中で活躍する。その後、渡辺貞夫(as)等のグループを経て、99年に渡米。ニューヨークのジャズシーンで活躍した後、2004年に帰国。そして、2作目のリーダーアルバム「Drumgenic」(M&I/ポニーキャニオン)をリリースする。インターネット人気投票(Jazz Page)において00年、05年度、1位を獲得。また、スイングジャーナル誌人気投票では07年度、3位に輝く。現在は自己のグループのほか、多くのグループで精力的な活動をしている。

小山太郎ホームページ [www.taro-koyama.com](http://www.taro-koyama.com)

## 厳しさのなかの愛情

んです。

日本のジャズ界には後進を育てようという気風があります。僕も何人かの人に師事しました。僕が現在、ドラマーとして活躍できるようにになったのは、師匠からの訓練を受けきったからだと思えます。

初めの師匠・猪俣猛いのまたたけさんとの出会ったのは、小学六年生のときです。僕の叩いた音を聞いて、「なかなかいいセンスしてんなあ。右手のレガートが大人の音をしているよ」と言ってくれたんです。それがキ

ツカケで、中学校に入ると同時に猪俣さんに師事するようになり、週に一回、栃木から東京の猪俣さんのスクールに通いました。高校のころには講師クラスで生徒さんに教えるぐらいにまで上達しました。

そして、高校卒業後の進路に迷っていたとき、「オーディションを受けに来いよ！」って声をかけてくれたのが、ベーシストの河上修さんです。何とオーディションに合格したその日に、早速メンバーとして練習に参加しました。河上さんは大変に厳しい方で、本番中にもよく叱られました。しかし、

プロとして生きるために、懸命にくらいついていきました。

その後は、ジャズ界の大御所・渡辺貞夫さんのバンドにも参加しました。渡辺さんもとんでもなく厳しい方で、「ジャズのドラマーは、オーケストラでいうと指揮者みたいなもんなんだ。バンドがよくなるかどうかはドラムで決まるんだ！」と言っては、それは全力で訓練してくれました。あまりに厳しくて、続かない人も多い

## ピンチをチャンスに



絶賛発売中! TOWN MOOK 食楽 責任編集

# 厳選! 300店 旨い東京

◎食楽編集部が食べまくった3年間を1冊に凝縮!



定価880円(税込)

食楽

8月号は7/5(土)発売です!

定価780円(税込)

北京・広東・四川・上海 四大中華「旨さ」の秘密 中国料理大全

特集 この夏の注目の一杯が大集結! 冷やしラーメン2008決定版

徳間書店



## ピンチを チャンスに



のですが、僕は必死で頑張りました。

この十数年間は本当につらい日々でしたが、それでもやり通せたのは、厳しい訓練のなかに「愛情」があることを感じられたからです。それに、小学校のころに受けたイジメが、僕の精神力を強くしていましたね。人生には一切無駄はないなあと思いました。

## 最後に勝った人が 真の勝者

一九九九年から五年間、自身の

音楽スタイルを見直すために、今まで日本で築いてきた地位をすべて手放して、ジャズの本場・ニューヨークに渡りました。

そんななか、二〇〇一年九月十一日「同時多発テロ」が発生します。

一緒に渡米した妻は、二機目の飛行機がビルに突入する瞬間を目撃してしまいました。目の当たりにしたショックはとつても大きかったと思います。また、生活習慣にもなかなか馴染めず、苦労は絶えませんでした。

そんな状況でも、夫婦が力を合わせて頑張れたのは、同じニューヨーク在住のトランペッター・大野俊三さんをはじめ、諸先輩からの激励があったからです。そのなかで特に印象に残っているのは、「いろんなことがあるかもしれないけれど、最後に勝った人が真の勝者なんだ！戦い続けていれば必ず道は開けるよ！」という言葉でした。

さまざまな困難にも、一歩も退

かず頑張りと通じたことで、ドラムの技術は飛躍的に向上し、当初の目的を果たして日本に帰国しました。

帰国後、「演奏がガラッと変わった！」と言われます。なかでも嬉しいのが、「聴いているとワクワクする」という感想です。聴いてくれる人に、勇気と希望、そして生きる力を与えるドラマーになることが僕の生涯の目標ですが、そのためには、僕自身が演奏を楽しむ、充実していかないといけないと思うんです。

ドラムを叩き始めたころに感じていたその思いを、ニューヨークで取り戻すことができました。と同時に、プロになってすぐのころ、河上修さんに言われた、「電気ウナギが、相手をしびれさせることができるのは、自分自身がしびれているからなんだ！」という言葉が、ようやく実感できるようになりました。

これからも一切の惰性を排して、いかなる困難にも挑戦し続け

ていく人生でありたいです。

## 師匠への恩

最近特に、師匠への恩を感じます。

昨年八月、地域密着のジャズイベントとして歴史のある「今治ジャズタウン」に参加しました。そのイベントには師匠である猪俣さんがずっと参加されています。

イベントが終わってしばらくして、参加者の方が撮ったある映像を見せてもらいました。そこには、僕の演奏中に、舞台の袖で猪俣さんがじつと立って、声援を送ってくれている様子が映っていました。心が震えましたね。師匠っていうのは、いつまでも弟子のことを見守ってくれる本当にありがたい存在だなあと感激しました。

かつて、厳しく叱られた師匠と、笑いながら話ができるようになった今、師匠と仰ぐ人たちと巡り合えた幸福を噛み締めています。

(談)